平成２５年度研究協議会資料〔研究課題番号：３中学校〕

都道府県・指定都市番号	１７	都道府県・指定都市名	石川県
学校名（生徒数）	金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校（４６６人）		

（本研究に係る問い合わせ先）
所在地：〒921-8105　石川県金沢市平和町１丁目１番15号
電話番号：076-226-2121
メールアドレス：kfutyu@futyu.ed.kanazawa-u.ac.jp
学校のホームページのURL：http://partner.ed.kanazawa-u.ac.jp/futyu/

【研究成果のポイント】

○研究のキーワード：「多面的・多角的」，根拠
○研究成果のポイント：
①地理的分野・歴史的分野において，「多面的・多角的」に（あるいはあえて「多面的」，「多角的」に分けて）考察する実践を積み重ねることで，公民的分野ではより思考を深めることが可能となった。
②「多面的・多角的」に社会的事象を捉え，考察させることで，社会科の基本的な考え方とされる社会的事象を比較したり関連付けたりする力が身に付いてきた。
③「多面的・多角的」に社会的事象を捉え，根拠を示しながら考察させることで，生徒は社会科の授業以外においてもこうした物事の捉え方を用いるようになった。

【研究の目的，研究内容】

（１）研究主題

多面的・多角的に考察する力を育む指導と評価

（２）研究主題設定の理由

学習指導要領にあるように，「国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う」ことが社会科の目標である。本校社会科ではそれを受けて，最終的に社会の一員として自分の意見をもつために必要な力を，生徒に身に付けさせたいと考えている。その力には「多面的・多角的」に考察する力に加え，論理的に物事を説明する力，他者の意見を検討し自分の意見を変えたり発展させたりする力が含まれる。

そこで，多面的・多角的な考察について昨年度の研究を継続するとともに，本年度はさらに考察の過程を可視化し，どのような根拠で結論を導き出したのかを明確にすることにした。これにより，より論理的な思考が生徒に身に付くと考え，研究を進めることにした。

（３）研究体制

今回の研究は教科部会が中心となって進めた。研究主題について，１・２年の担当教員２名で主に地理的分野を，３年の担当教員１名で公民的分野の研究を担当した。研究主題が本校の研究の方向性とほぼ一致しているため，大学とも連携しながら思考力・判断力・表現力の育成について理解を深めてきた。

（４）１年間の主な取組の経過

平成25年度	・多面的・多角的に社会的事象を捉えさせる学習活動と思考・判断・表現の過程や結果を共有させる場面を設定した授業実践に取り組んだ。（4～ 5月） ・本校の第61回教育研究発表会において授業を公開するとともに授業整理会を開いて研究を深めた。（5月 31日） ・研究発表会で明らかになった成果や課題を基に，公民的分野での実践を中心に研究を深め，本校の研究中間意見交換会で研究の中間報告を行う。（6～11月） ・実践と生徒へのアンケート調査の結果を分析し，研究成果をまとめた。 年間指導計画に，研究テーマに沿った実践を追記する。（12～2月）

（５）具体的な研究内容・方法，研究を進める上での工夫点等

①多面的・多角的に考察させる学習活動

分野の特性から歴史的事象は支配者・被支配者などの複数の立場から，地理的事象は自然的条件，社会的条件などの複数の側面から，それぞれ事象を捉えやすいと考えた。そこで地理的分野と歴史的分野では「多面的」「多角的」な事象の捉え方を身に付けさせ，「多面的・多角的」な考察に適した単元や題材で両者を結び

付ける力を身に付けさせることを想定した。また，公民的分野ではそれを受けて，討論などを通したより深い思考を促す取組を行った。

②論理的に考察させる学習活動

筋道を立てて論理的に考察する力を身に付けるには，その思考を可視化し，根拠と結論の妥当性を自ら分析・検討することが必要であると考えた。そこで根拠，理由付け，結論を明確に分けることを目的に，トゥールミンモデルを利用して可視化を図った。こうした思考の可視化は他者との比較においても有効であり，根拠，理由付け，結論のそれぞれの視点で他者の意見を分析することで，より思考を深められると考えた。

③形成的評価を重視した学習活動

考察する力を評価するには，発表や討論の発言内容，ワークシートやレポートの記述内容を対象とすることが有効である。そして，評価の妥当性を高めるために思考過程の可視化を行い，それを生徒に共有させることで自己評価が促されると考えた。具体的にはトゥールミンモデルの利用や板書の工夫，教材提示装置によるワークシートの提示などで可視化を図り，学習成果のフィードバックを意識した取り組みを行った。

【研究成果とその意義等】

（１）研究成果と課題

①生徒は「多面的」もしくは「多角的」に社会的事象を捉えることで，それぞれの社会的事象の捉え方を効率よく理解し，身に付けることができた。また，地理的分野と歴史的分野を通して，「多面的・多角的」に事象を捉える力を高めていくことで，公民的分野では多面的・多角的に考察する力が身に付いた。

②生徒は「多面的・多角的」に事象を捉えて考察するなかで，社会的事象を比較したり関連付けたりすることが一層的確にできるようになってきた。

③「多面的・多角的」に社会的事象を捉え，根拠を示しながら考察させた結果，生徒が他教科等の学習や日常生活の中でこうした物事の捉え方を意識し，活用しようとするようになった。

（２）研究成果の意義等

①地理的分野では「多面的」，歴史的分野では「多角的」というように，学習内容に適した事象の捉え方を指導するとともに，生徒の習熟の度合いを踏まえて適切な単元や題材で「多面的・多角的」に考察する場面を設定していく。このように多面的な考察 → 多角的な考察 → 多面的・多角的な考察といったスパイラル構造を意識することで，多面的・多角的な考察が身に付いていくことが分かった。また，立場が決まれば，見るべき事象の側面が見え，立場が変われば見るべき側面も変わり，結論も変わる可能性が出てくるなど，社会的事象の持つ側面と事象を捉える角度には深い関連があることを再認識できた。

②異なる立場や見方から社会的事象を捉えることで比較して考察しようとする姿勢が，また社会的事象のもつ複数の側面を扱うことでそれらの情報を関連付けようとする姿勢が身に付き，より深く社会的事象の意味や意義を理解できると考えられる。「多面的・多角的」という社会科における社会的事象の捉え方は，その重要性に加え，比較，関連付けといった考え方を一層促していくことが確認された。

③「多面的・多角的」な捉え方が学習活動における思考の深まりを促すだけでなく，生徒の日常生活に生かされることによって，一面的に終わらない現代社会の理解が可能となった。社会科の目標である「公民的資質の基礎」の育成に直結する取組としての重要性が確認された。

（３）指定期間終了後の取組

①研究を進めていく中で、「多面的・総合的に考える力」といったＥＳＤの視点を取り入れた学習指導との関連が深いことが分かった。そこで，今後はＥＳＤの視点を取り入れた学習指導を展開していくためにも、実践事例を蓄積し，年間計画に位置付け，研究を継続させる計画である。

②生徒は根拠の重要性について理解を深めたものの，何が考察の根拠となるかについてはいまだ自信をもてない状況も一部に見られる。資料の読解力を高める学習を取り入れるとともに，評価を工夫し，それを積極的に生徒にフィードバックすることで，その課題解決を検討している生徒の自信を引き出す必要がある。